

日本語から考えるヒンディー語の人魚構文（体言締め文）

今村 泰也

1. はじめに¹

本稿では、日本語の言語現象を出発点とし、ヒンディー語²のある種の構文を「人魚構文」（体言締め文）として考察する。角田（1996）は(1)の構造を持つ文を「体言締め文」（noun-concluding construction）と呼び、考察した。現在では「人魚構文」（mermaid construction）と呼んでいる。例は(2)-(4)。以下、日本語の例はいずれも角田（2011）から引用している。

(1) 体言締め文または人魚構文のプロトタイプ

[節] 名詞 だ。 [Clause] Noun Copula.

- (2) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。
- (3) [太郎は今本を読んでいる] ところだ。
- (4) [外では雨が降っている] 模様だ。

角田（2011: 54-55）は、この種の構文は日本語では頻繁に使うが、よく考えてみると統語の面でも意味の面でも奇妙であると述べている。構造的には文の前半は動詞述語文と同じ構造を持ち、後半は名詞述語文と同じ構造を持っている（この点の人魚に似ている）。意味の面では、例えば、(2)について文字通りの意味を考えると、太郎は予定ではない（人間である）。同様に、(3)について言うと、太郎はところではなく、(4)について言うと、雨は模様ではない（自然現象である）。

上記の構文は世界的に見ても珍しく、地理的にはアジア、典型的には日本語に近い言語（膠着的で SOV 語順の後置詞言語）で見ついているが、最近ではアフリカの言語（シダーマ語）や語順が日本語とは逆のタガログ語（基本語順は VOS あるいは VSO）にも存在することが報告されている（河内 2012, 片桐 2010）。

タガログ語の場合、サンスクリット語からの借用語である *mukha* 「顔, 表情」が「*mukha*+ 連結辞+ [節]」³の形で出来事や状態の可能性の高さを表す（次例(5)）⁴。

(5) *mukha-ng* [sa-sabog na ang bulkan].

face-LK AF:CONT-erupt already TOP volcano

直訳：「火山がもう噴火する顔だ。」

意識：「火山がもうすぐ噴火しそうだ。」

（片桐 2010: 116）

本稿では、タガログ語のようにこの種の構文を体言で始める言語があることも考慮に入れ、体言締め文ではなく人魚構文の呼称を用いる。

2. 日本語の人魚構文の特徴

ここでは日本語の人魚構文の諸特徴のうち、後述のヒンディー語の人魚構文に関わる項目について述べる。

(a) [節] の述語

(1)で示した人魚構文の構造において、[節]の述語の形は過去形(例は(6))または非過去形(例は(2)-(4))で現れる。また、[節]の部分だけで文として使える。

(6) [私は一人取り残された] 思いだ。

(b) 「名詞」のタイプ

「名詞」の位置には実質名詞のほか、形式名詞(例:「つもり」「はず」「わけ」)やクリティック⁵の「の」が現れる。

(7) [学生は毎週レポートを提出する] 決まりだ。 (実質名詞の例)

(8) [男の子は泣かない] ものだ。 (形式名詞の例)

(9) 学生が一生懸命勉強している。[試験がある] のだ。 (クリティックの例)

(c) 構文が表す意味

人魚構文は典型的に、(i) モーダルの(例は(2), (6)-(8)), (ii) アスペクト的(例は(3), (10)), (iii) 証拠的(evidential, 例は(4))な意味を表す。また、(iv) 文体的な効果を持つ場合がある(例は(11))。

(10) [太郎は今出かける／た] ところだ。

(11) [我々は心からお詫びする] 次第です。

3. ヒンディー語の基本文

ヒンディー語の人魚構文について述べる前に、本節でヒンディー語の基本文を概観する。

(12) *bhaarat=kii raajdhani nait dillii hai.*

India=GEN.F capital.F.SG New Delhi COP.PRS.3SG

「インドの首都はニューデリーだ。」

(13) *raam siitaa=se lambaa hai.*

Ram.M Sita.F=than tall.M.SG COP.PRS.3SG

「ラームはシーターより背が高い。」

(14) *vah mujh=ko sab baatē bataa-egaa.*

3SG 1SG.OBL=DAT all matter.F.PL tell-FUT.3.M.SG

「彼は私にすべてのことを話すだろう。」

(Kachru 2006: 140)

(12)は名詞述語文, (13)は形容詞述語文, (14)は動詞述語文である。名詞述語文と形容詞述語文は文末に Copula (*honaa* の活用形) を伴う。*honaa* は英語の ‘be’ に当たる動詞で, Copula のほか, 存在動詞 (例は(15)), 助動詞 (例は(16)), 一般動詞 (‘become, happen, be held’ などの意。例は(17), (18)) として動詞述語文でも頻繁に使われる。

(15) *mez=par do kitaabẽ hãĩ.*
table.F.SG=on two book.F.PL exist.PRS.3PL

「テーブルの上に2冊の本がある。」

(16) *vah kitaab paRh rahaa hai.*
3SG book.F.SG read PROG.M.SG AUX.PRS.3SG

「彼は本を読んでいる。」

(17) *kamre saaf hue?*
room.M.PL clean become.PFV.M.PL

「部屋はきれいになったか？」

(Kachru 2006: 92)

ヒンディー語には複数の連体修飾構造⁶があり, 修飾節を名詞の前に置く型 (修飾節前置型) と修飾節を名詞の後に置く型 (修飾節後置型) の両方が使われる。ここでは, 人魚構文に関連する修飾節前置型の連体修飾構造の例を挙げる⁷。

(18) [*kuẽ=par kisii=ke aa-ne*]=*kii aahaT*
well.M.SG.OBL=at someone.OBL=GEN.M.OBL come-INF.OBL=GEN.F sign.F.SG

huii.

happen.PFV.F.SG

「井戸に誰かが来る気配がした。」

(Premchand, *Thakur ka Kuan*)

上例では, [*kuẽ=par kisii=ke aa-ne*]「井戸に誰かが来る」という節が名詞 *aahaT*「気配」を修飾している。この連体修飾構造では, 修飾節内の主語は属格で標示され (*kisii=ke*), 動詞は不定詞形をとる。不定詞は名詞を直接修飾することができず, 間に属格後置詞=*kaa* (上例では女性形の=*kii*) を挟む必要がある (属格後置詞=*kaa* は中国語の「的」のように連体修飾構造の標識になっている⁸)。ヒンディー語では名詞, 代名詞, 形容詞, 不定詞などが後置詞を伴うと斜格形 (後置格形) をとるという規則があり, これにより不定詞 *V-naa* は斜格形 *V-ne* に変わる (上例では *aa-ne* ‘come-INF.OBL’)

4. ヒンディー語の人魚構文および関連構文

筆者の知る限り, ヒンディー語には人魚構文のプロトタイプ ([Clause] Noun Copula) にあてはまる構文はない。しかし, Noun の位置にクリティックの=*vaalaa* が現れる変種がある。

4.1 クリティック=*vaalaa*

=*vaalaa* は非常に生産的で、ヒンディー語で多用される多義的な文法的要素である。=*vaalaa* は単独で出現することができず、先行研究では接辞とされているが (e.g. Shukla 2001: 97; Montaut 2004: 153; Kachru 2009: 413), 筆者はその文法的特徴からクリティックに分類している (その理由は 4.3.4 節で述べる)。

=*vaalaa* はサンスクリット語の名詞 *paalaka* ‘guardian, protector; one who maintains or observes’ が語源とされている (Beams 1879: 238-239; Kellogg 1893: 342, 355; Montaut 2004: 146, 153。三者とも例証として「牛飼い」を意味するサンスクリット語の *gopaalaka* とヒンディー語の *gvaalaa* の対応を挙げている)。

=*vaalaa* には二つの用法がある。一つは「…する (人/もの)」を意味する名詞句, 形容詞句を作る用法で, もう一つの用法が人魚構文である。以下, 二つの用法の具体例を見ていく。

4.2 名詞句, 形容詞句を作る=*vaalaa*

=*vaalaa* は接続する語に専門 (職業), 行為, 所有, 関係などに関わる多様な意味を加え, 名詞句 (例は(19), (20)), 形容詞句 (例は(21), (22)) を作る。

(19) *ganne=vaalaa*

sugarcane.M.SG.OBL=*vaalaa*.M.SG

「サトウキビ売り」

- (20) *kaam* *kar-ne=vaale* *kam hãĩ*,
work.M do-INF.OBL=*vaalaa*.M.PL few COP.PRS.3PL
baat *kar-ne=vaale* *zyaadaa*.
talk.F.SG do-INF.OBL=*vaalaa*.M.PL many

「仕事する人は少なく, 話す人は多い。」

(Kachru & Pandharipande 1983: I-7)

(21) *lambe* *baalõ=vaalii* *laRkii*

long.M.PL.OBL hair.M.PL.OBL=*vaalaa*.F girl.F.SG

「長い髪をした女の子」

(Montaut 2004: 153)

(22) *dillii* *jaa-ne=vaalii* *gaaRii*

Delhi go-INF.OBL=*vaalaa*.F vehicle.F.SG

「デリー行き列車」

=*vaalaa* は, *vaalaa/vaale/vaalii...* のように屈折変化し, 名詞句を作る場合は主語の性・数に一致し, 名詞と同じ変化をする ((19)はサトウキビ売りが男性・単数であることを表し, (20)は仕事する/話す人が男性または男女の複数であることを表している)。また, 形容詞句を作る場合は後続名詞の性・数・格に一致し, 形容詞と同じ変化をする。

4.3 人魚構文 [X V-ne]=vaalaa honaa

4.3.1. 人魚構文の構造

この用法では、=vaalaa は(1)の Noun の位置に現れ、述語の一部になる。ヒンディー語の人魚構文は(23)の構造を持ち、具体的には(24)のようになる。

(23) [Clause]=Clitic Copula.

(24) [X V-ne]=vaalaa honaa.

次に人魚構文の用例を挙げる。

(25) [māĩ yuunivarsiTii jaa-ne]=vaalaa hũũ.

1SG university.F.SG go-INF.OBL=vaalaa.M.SG COP.PRS.1SG

直訳：「私は大学へ行く人だ。」

意識：「私は大学へ行くところだ。」

(McGregor 1995: 171)

人魚構文は動詞の不定詞にクリティックの=vaalaa を付け（この時、不定詞 V-naa は属格後置詞=kaa が付いた時と同じように斜格形 V-ne になる）、その後 Copula (honaa の活用形) を伴う。=vaalaa と Copula は [Clause] の主語に一致する（上例の=vaalaa (M.SG) は主語 māĩ (1SG) の性・数に一致し、hũũ (COP.PRS.1SG) は人称・数に一致している）。

用例をもう二つ挙げる。

(26) [Diskavarii śanivaar=ko floriDaa pahuñc-ne]=vaalaa hai.

Discovery.M.SG Saturday=on Florida arrive-INF.OBL=vaalaa.M.SG COP.PRS.3SG

直訳：「ディスカバリー号は土曜日にフロリダに到着するものだ。」

意識：「ディスカバリー号は土曜日にフロリダに到着する予定だ。」

(<http://khabar.ibnlive.in.com/news/10760/2>)

(27) [vah aaj kal mar-ne]=vaalaa hai.

3SG today tomorrow die-INF.OBL=vaalaa.M.SG COP.PRS.3SG

直訳：「彼は一両日中に死ぬ人だ。」

意識：「彼は一両日中に死ぬだろう／死にそうだ。」

(Platts 1878: 330)

上記の構文（人魚構文）に関する詳しい研究は土田（1985）、今村（2008a）以外になく、文法書では（この構文は）「英語の be going/about to を表す」（e.g. Hook 1979: 15; Snell & Weightman 2003: 130）、「近接未来を表す」（e.g. Platts 1878: 330; Montaut 2004: 112）といった簡単な記述にとどまっている。

4.3.2. 人魚構文の特徴および人魚構文が表す意味

ヒンディー語の人魚構文の全般的な特徴は以下の通りである。

- (a) 人魚構文の Noun の位置に名詞ではなくクリティックの=vaalaa が入る。
- (b) =vaalaa はサンスクリット語の名詞 *paalaka* ‘guardian, protector; one who maintains or observes’ が語源とされている。
- (c) [Clause]内の動詞は不定詞形である。この点で人魚構文は修飾節前置型の連体修飾構造（例は(18)）に似ている。
- (d) 修飾節前置型の連体修飾構造では修飾節内の主語が属格で標示される（例は(18)）。一方、人魚構文では主格で標示される。
- (e) 人魚構文は、(i) ‘be about to’ 「今にも…しようとしている」「…するところだ」（アスペクト的な意味⁹⁾）、(ii) 予定、意志「…する予定／つもりだ」（モーダルな意味）、(iii) 話し手の推量、確信「…しそうだ」「必ず…する」（モーダルな意味）を表す。

(i) ‘be about to’（アスペクト的な意味）を表す用例として、上例(25)および下例(28), (29)が挙げられる。この用法では(29)のように証拠的な意味を表す場合がある。

(28) *baiTh-ie, [māĩ aap=ko bulaa-ne]=vaalii thii.*
 sit-IMP.HON 1SG 2HON=ACC call-INF.OBL=*vaalaa*.F COP.PST.F.SG
 「お座りください。あなたを呼ぼうとしていたところです。」 (Nirmal Verma, *Antim Aranya*)

(29) [*paanii baras-ne=hii]=vaalaa hai.*
 rain.M fall-INF.OBL=EMPH=*vaalaa*.M.SG COP.PRS.3SG
 「今にも雨が降りそうだ。」 (Jagannāthan 1981: 321)

(ii) 予定、意志（モーダルな意味）を表す用例は、上例(26)および下例(30), (31)である。

(30) *do tiin mahiine baad, [māĩ yah kaam choR de-ne]=vaalaa*
 two three month.M.PL after 1SG this job.M quit give-INF.OBL=*vaalaa*.M.SG
hũũ.
 COP.PRS.1SG
 「二、三ヶ月後には俺はこの仕事をやめてやるつもりだ。」 (土田 1985: 613)

(31) [*māĩ tapaścaryaa=mẽ rat rah-ne aur uttam dharm=kaa*
 1SG ascetic.practice=in devote-INF.OBL and supreme religion/law=GEN.M.SG
paalan kar-ne]=vaalaa hũũ.
 keeping.M.SG do-INF.OBL=*vaalaa*.M.SG COP.PRS.1SG
 「私は苦行に専念し、最高の法を護持するつもりだ。」

(http://www.ganeshgaatha.com/ganesh_leela_detail.php?id=31)

上述のように、先行研究では人魚構文は近い未来を表すとされている。しかし、実際の用例を見ると、比較的遠い未来であっても実現が確実な事態に人魚構文が使われることがわかる。

次例(32)は12年に一度行われるヒンドゥー教の大祭 (*Kumbh Mela*) の開催予定, (33)は小惑星が地球に接近する時期に関する記事である。

(32) [*haridvaar=kaa aglaa kumbh 2021=mẽ=hii ho-ne*]=*vaalaa*
 Haridwar=GEN.M.SG next Kumbh.M 2021=in=EMPH be.held-INF.OBL=*vaalaa*.M.SG
hai.
 COP.PRS.3SG

「ハリドワールの次回のクンブ・メーラーは2021年に行われる予定だ。」

(http://in.jagran.yahoo.com/news/local/bihar/4_4_6436984_1.html)

(33) [*ek kSudragrah epofis 2029=mẽ pṛthvii=ke bahut paas aa-ne*]
 a asteroid.M apophis 2029=in earth=GEN very near come-INF.OBL
 =*vaalaa hai*.
 =*vaalaa*.M.SG COP.PRS.3SG

「小惑星アポフィスは2029年に地球に最接近する予定だ。」

(<http://www.dw-world.de/dw/article/0,,5261769,00.html>)

(iii) 話し手の推量, 確信 (モーダルな意味) を表す用例は, 上例(27), 次例(34)である。

(34) *hamẽ pataa thaa ki [Tokyo=mẽ ek baRaa*
 1PL.DAT information.M.SG exist.PST.M.SG CONJ Tokyo=in a big.M.SG
bhuukamp aa-ne]=vaalaa hai.
 earthquake.M.SG come-INF.OBL=*vaalaa*.M.SG COP.PRS.3SG

「私たちは東京に大地震が必ず来るということを知っていた。」

(<http://www.amarujala.com/vichar/VicharDetail.aspx?nid=897&tp=b&Secid=4&SubSecid=9>)

以上の例から, ヒンディー語の人魚構文はアスペクト的, モーダル的な意味を表し, タガログ語の人魚構文 (1節), 日本語の人魚構文 (2節) との類似が見られる。

人魚構文 [*X V-ne]=vaalaa honaa* で表される事態はいずれも蓋然性が非常に高いが, まだ実現していない事態 ((28)のように Copula が過去形の場合は実現しなかった事態) である。

4.3.3. 人魚構文のプロトタイプとの違い

人魚構文のプロトタイプ [Clause] Noun Copula と [*X V-ne]=vaalaa honaa* の主な違いは, Noun の位置にクリティックが現れることに加え, 前者が [Clause] の部分だけで文として使えるのに対し, 後者は使えないことである。(35)は人魚構文, (36)はその [Clause] である ((36)の不定詞は後ろに=*vaalaa* が付かないため, *V-naa* になる)。

(35) [*māi yuunivarsiTii jaa-ne*]=*vaalaa hūū*.
 1SG university.F.SG go-INF.OBL=*vaalaa*.M.SG COP.PRS.1SG

直訳：「私は大学へ行く人だ。」

意識：「私は大学へ行くところだ。」

((25)の再掲)

(36) **māi yuunivarsiTii jaa-naa*.
 1SG university.F.SG go-INF

「私は大学へ行く。」

4.3.4. =*vaalaa* の形態論的位置付け

ここでは筆者が=*vaalaa* を接辞ではなくクリティックと考える理由を（紙幅の都合上）簡単に述べる。以下は=*vaalaa* の文法的特徴である。

(a) =*vaalaa* は *vaalaa/vaale/vaalii*...のように語形変化（屈折変化）する。

(b) =*vaalaa* が接続する語（以下, host）が斜格形になる。つまり, =*vaalaa* は host の格を支配している（統語現象）。

(c) =*vaalaa* は名詞, 不定詞以外に, 形容詞, 副詞, 代名詞などにも付く¹⁰（例は割愛する）。

(d) =*vaalaa* のスコープ（作用域）は等位構造に及ぶ。

(37) *in dhamaakō=se [mar-ne aur ghaayal ho-ne]=vaalō*
 these explosion.M.PL=INST die-INF.OBL and be injured-INF.OBL=*vaalaa*.M.PL.OBL
 =*kii taadaad*
 =GEN.F number.F.SG

「これらの爆発による死傷者数」

(BBC060310_kashinath_varanasi)

上例の [] 内には不定詞が二つあり, 等位接続詞で結ばれているが, 両方とも斜格形 (V-*ne*) になっている。したがって, =*vaalaa* のスコープは等位構造に及んでいる（接辞のスコープは等位構造に及ばない）。人魚構文の(31)も等位構造の例である。

(e) host と=*vaalaa* の間に他のクリティックの介在を許す。

上例(29)では, 不定詞と=*vaalaa* の間にクリティック=*hii*¹¹が介在している。接辞の場合, 語幹との間にクリティックの介在を許さない。

4.4 関連構文

以下は人魚構文に関連する構文の例である。

(38) [*rohit=kaa fiziks paRh-ne*]=*kaa iraadaa hai*.
 Rohit=GEN.M.SG physics study-INF.OBL=GEN.M.SG intention.M.SG exist.PRS.3SG

「ローヒットは物理学を学ぶつもりだ。」

(Kachru 1990: 65)

(39) [*hema=par saaraa ghar samhaal-ne*]=*kii* *zimmevaarii* *hai*.
 Hema=on entire home manage-INF.OBL=GEN.F responsibility.F.SG exist.PRS.3SG
 「ヘーマーには家財一切を管理する責任がある。」 (Kachru 1990: 65)

(40) *raat so-ne=se* *pahle* [*šibu=ko paan khaa-ne*]=*kii*
 night sleep-INF.OBL=than before Shibu=DAT betel eat-INF.OBL=GEN.F
aadat *hai*.
 habit.F.SG exist.PRS.3SG
 「夜寝る前にシブにはパーン（キンマ）を噛む習慣がある。」 (Vikesh Nijhavani, *Bhukh*)

上例はいずれも [Clause] が属格後置詞=*kaa* を介して Noun を修飾し、文末に *hona* を伴っていることから人魚構文のプロトタイプにあてはまるように見える。しかし、この構文は以下の二つの点で人魚構文のプロトタイプとは異なる。

(i) [Clause] の部分だけで文として使えない。例えば、(41)は(38)の [Clause] 部分であるが（不定詞は後ろに=*kaa* が付かないため、*V-naa* になる）、文としては不適格である。

(41) **rohit=kaa* *fiziks* *paRh-naa*.
 Rohit=GEN.M.SG physics study-INF
 「ローヒットは物理学を学ぶ。」

(ii) この構文における文末の *hona* は Copula ではなく、存在動詞である（3節参照。Copula の解釈では意味が通らない）。

したがって、本稿では上記の構文を人魚構文とは考えない。なお、ヒンディー語には英語の ‘have’ に相当する所有動詞がなく、叙述所有 (X has/owns Y) は格標識（後置詞）と存在動詞を用いて「X の近くに Y がある」「X の Y がある」「X に Y がある」のように迂言的に表される（所有物 Y によって異なる格標識が使われる）。上例(38)-(40)はヒンディー語の所有構文である¹²。

5. =*vaa/aa* の文法化¹³

4.1 節で述べたように、=*vaalaa* はサンスクリット語の名詞 *paalaka* ‘guardian, protector; one who maintains or observes’ が語源とされている。本節ではこの語源説が正しいと仮定して、=*vaalaa* の文法化について考察する。

- (a) サンスクリット語の名詞 *paalaka* がヒンディー語のクリティック=*vaalaa* に変化した。
- (b) 語彙的要素（名詞）から文法的要素（「…する（人／もの）」を意味する名詞句，形容詞句を作る）に変化した。
- (c) さらに人魚構文では、=*vaalaa* の「…する人／もの」という意味が薄れ、人／ものの属性、特質を表す属性叙述（名詞述語文）から具体的な出来事を表す事象叙述（動詞述語文）に変

化している。この二種類の叙述は異なる統語構造を持つ（下表1）。

表1 X V-ne=vaalaa honaa の二種類の叙述

統語構造	意味
属性叙述 [X [V-ne=vaalaa] honaa]	「Xは…する人／ものだ」(人／ものの属性, 特質)
事象叙述 [X [V-ne=vaalaa honaa]]	「Xは…しようとしている／するところだ」(アスペクト) 「Xは…する予定／つもりだ」(予定, 意志) 「Xは…しそうだ／必ず…する」(話し手の推量, 確信)

属性叙述と事象叙述の統語的な違いは否定文における否定辞の位置に現れる。ヒンディー語の否定辞は通常、動詞の直前に置かれるため、属性叙述の場合は Copula の前に否定辞が置かれ（例は(42)）、事象叙述（人魚構文）の場合は V-ne の前に否定辞が置かれる（例は(43), (44)）。

(42) [minisTar saahab cup baiTh-ne]=vaale nahī the.
minister.M HON silent sit-INF.OBL=vaalaa.M.PL NEG COP.PST.M.PL
「大臣閣下は黙って座っているような人ではなかった。」(Rahi Masoom Raza, *Neem ka Ped*)

(43) lekin [māī koiī taariix tay nahī kar-ne]=vaalaa hūī.
but 1SG certain date deciding NEG do-INF.OBL=vaalaa.M.SG COP.PRS.1SG
「しかし、[今, 退陣の] 時期を決めるつもりはない。」(BBC060907_blair_party_leave)

(44) jab tak aap apniī soc=ko nahī badl-ēge,
by the time 2HON REFL.GEN.F thought.F=ACC NEG change-FUT.2HON.M
tab tak [badlaav nahī aa-ne]=vaalaa hai.
by then change.M.SG NEG come-INF.OBL=vaalaa.M.SG COP.PRS.3SG
「あなたが考えを変えない限り、[状況は] 変わるまい。」(ZEE111115)

角田（1996, 2011）は人魚構文の構造について、(45)のように複合述語を含むと見ている。

(45) 明日 花子が 本を 買う 予定=だ。
状況語 主語 目的語 (複合) 述語 (角田 2011: 66)

ヒンディー語の場合も V-ne=vaalaa honaa が複合述語になっていることが、(43), (44)の否定辞の位置からわかる。(42)のような文は表面的な構造は人魚構文に似ているが、=vaalaa の意味（…する人／もの）が変容しておらず、否定辞の位置も人魚構文と異なる。したがって、人魚構文とは考えない。

上述の=vaalaa の発達は文法化の観点から表2のようにまとめられる。

表2 =*vaalaa* の発達

第1段階	サンスクリット語の名詞 <i>paalaka</i>	‘guardian, protector’
第2段階	ヒンディー語の文法的要素 = <i>vaalaa</i> (語彙的要素から文法的要素へ)	名詞句, 形容詞句を作る
第3段階	[X [V- <i>ne=vaalaa</i>] <i>honaa</i>]	属性叙述
第4段階	[X [V- <i>ne=vaalaa honaa</i>]] (再分析)	事象叙述

6. まとめ

本稿では、ヒンディー語の人魚構文について考察を行った。ヒンディー語には人魚構文のプロトタイプ ([Clause] Noun Copula) にあてはまる構文はないが、その変種がある。ヒンディー語の人魚構文の特徴は以下の通りである。

- (a) Noun の位置にクリティックの=*vaalaa* が現れる。=*vaalaa* は主語の性・数に一致する。
- (b) [Clause] の動詞は不定詞形をとる。[Clause] の部分だけで文として使うことができない。
- (c) 人魚構文はアスペクツ的、モーダル的な意味を表す（人魚構文は、蓋然性が非常に高いがまだ実現していない（あるいは実現しなかった）事態の叙述に使われる）。
- (d) =*vaalaa* および V-*ne=vaalaa honaa* は形態的、統語的、意味的に変化（文法化）している。

注

¹ 本稿の内容は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「形容詞節と体言締め文：名詞の文法化」（代表：角田太作）で行った研究の一部であり、今村（2008a）および Imamura (forthcoming) に基づいている。

² ヒンディー語 (Hindi) はインド北部で話されている言語で、インドの主要な言語の一つである。系統的にはインド・ヨーロッパ語族のインド語派に属する。基本語順は日本語と同じ SOV で後置詞を持つ。個々の動詞形態は屈折的であるが、述語動詞全体では膠着的な様相を帯びる (町田 1998: 282)。

³ タガログ語には日本語の「だ」に当たるような Copula がない (片桐 2010: 115)。

⁴ サンスクリット語由来の *mukha* はヒンディー語でも「顔, 口, 前部」の意味で使われるが (ヒンディー語の発音規則により, 語末の *a* は発音されない), このような用法はない。

⁵ クリティック (接語) は語と接辞の特徴を併せ持つ中間的な言語形式で, 文法的には語の特徴を備えているが, 音韻的には他の語に従属している要素である (cf. Dixon and Aikhenvald 2002: 25)。クリティックは普通, 単独で発話することができず, 隣接する語と音韻的単位を形成する。

⁶ 本稿では修飾節とその修飾を受ける名詞を合わせた全体を連体修飾構造と呼ぶ。

⁷ ヒンディー語の連体修飾構造の詳細については今村 (2008b, 2011) を参照されたい。

⁸ 中国語の連体修飾構造の例：「学习汉语的学生」（中国語を学ぶ学生）。

⁹ Comrie (1976) の *prospective aspect* を参照。

¹⁰ “An element is a clitic only if it can attach to hosts of diverse categories.” (Bickel and Nichols 2007: 176)

¹¹ =*hii* は接続詞以外ほとんどすべての自立語に接続し、「～ばかり、～こそ、～のみ、～だけ」などの意味を加える（古賀 1986: 253）。McGregor (1995) は=*hii* を *emphatic enclitic*, 古賀・高橋 (2006) は副助詞（先行する語を取り立てて強調する）に分類している。本稿では Sharma (2003), Butt and King (2004) にならい, =*hii* をクリティックとして扱う（グロスでは EMPH とする）。

¹² ヒンディー語の所有構文の詳細は、今村 (2009, 2010) を参照。

¹³ 文法化 (*grammaticalization*) とは、典型的には語彙的要素（動詞、名詞など）が意味的に抽象化し、文法的要素（とりわけ膠着的接辞／屈折形態）になることであり、文法的要素の多機能化や構文の発達も周辺の文法化とされる（大堀 2004）。

略号一覧

1,2,3=人称; ACC=対格; AF=行為者焦点; AUX=助動詞; CONJ=接続詞; CONT=未然相; COP=コピーラ; DAT=与格; EMPH=強調; F=女性; FUT=未来; GEN=属格; HON=敬称; IMP=命令; INF=不定詞; INST=具格; LK=連結辞; M=男性; NEG=否定辞; OBL=斜格; PFV=完了; PL=複数; PROG=進行相; PRS=現在; PST=過去; REFL=再帰代名詞; SG=単数; TOP=トピック; V=動詞
（グロスのハイフン ‘-’ は形態素境界、等号 ‘=’ はクリティック境界を表す）

参考文献

- Beams, John (1879) *A Comparative Grammar of the Modern Aryan Languages of India: Vol. III. The Verb*. London: Trübner & Co.
- Bickel, Balthasar and Johanna Nichols (2007) Inflectional morphology. In: Shopen, Timothy (ed.) *Language Typology and Syntactic Description: Vol. III. Grammatical Categories and the Lexicon*, Second edition, 169-240. Cambridge: Cambridge University Press.
- Butt, Miriam and Tracy Holloway King (2004) The status of case. In: Dayal, Veneeta and Anoop Mahajan (eds.) *Clause Structure in South Asian Languages*, 153-198. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) *Word: A Cross-Linguistic Typology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hook, Peter Edwin (1979) *Hindi Structures, Intermediate Level*. Ann Arbor: The University of Michigan.
- 今村泰也 (2008a) 「ヒンディー語の <V-ne-vālā honā> の三用法－属性叙述から事象叙述へ、客観的叙述から主観的叙述へ－」『南アジア研究』20: 7-28.
- 今村泰也 (2008b) 「日本語とヒンディー語の関係節の対照研究－関係節の種類と特徴、関係節化の可能性について－」『麗澤大学紀要』87: 15-38.
- 今村泰也 (2009) 「ヒンディー語の所有表現再考－類型論的観点からの考察－」『言語と文明』7: 17-39.
- 今村泰也 (2010) 「ヒンディー語・ウルドゥー語の他動詞 *rakhnaa* を用いた所有表現」『大阪大学世界言語研究センター論集』3: 261-283.

-
- 今村泰也 (2011) 「日本語から見たヒンディー語の連体修飾構造—いわゆる「外の関係」を中心に—」野瀬昌彦 (編) 『日本語と X 語の対照』 1-10. 愛知: 三恵社.
- Imamura, Yasunari (forthcoming) Mermaid construction in Hindi. In Tsunoda, Tasaku (ed.) *Mermaid Constructions* [Typological Studies in Language]. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Jagannāthan, Vī. Rā. (1981) *Prayog aur prayog*. Delhi: Oxford University Press.
- Kachru, Yamuna (1990) Experiencer and other oblique subjects in Hindi. In: Verma, Manindra K. and K. P. Mohanan (eds) *Experiencer Subjects in South Asian Languages*, 59-73. Stanford, California: CSLI Publications.
- Kachru, Yamuna (2006) *Hindi* [London Oriental and African Language Library 12]. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Kachru, Yamuna (2009) Hindi-Urdu. In: Comrie, Bernard (ed.) *The World's Major Languages*, Second edition, 399-416. London & New York: Routledge.
- Kachru, Yamuna and Rajeshwari Pandharipande (1983) *Intermediate Hindi*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- 片桐真澄 (2010) 「タガログ語の人魚構文に関する展望」『岡山大学文学部紀要』 54: 109-122.
- 河内一博 (2012) 「日本語に特有と言われる現象はアフリカにもある: シダーマ語 (エチオピア) の場合」第 5 回 NINJAL フォーラム (2012 年 3 月 24 日, 一橋記念講堂) 発表ハンドアウト.
- Kellogg, S. H. (1893) [1990] *A Grammar of the Hindi Language*, Second Indian edition. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- 古賀勝郎 (1986) 『基礎ヒンディー語』東京: 大学書林.
- 古賀勝郎・高橋明 (編) (2006) 『ヒンディー語=日本語辞典』東京: 大修館書店.
- 町田和彦 (1998) 「ヒンディー語」東京外国語大学語学研究所 (編) 『世界の言語ガイドブック 2 (アジア・アフリカ地域)』 273-285. 東京: 三省堂.
- McGregor, R. S. (1995) *Outline of Hindi Grammar*, Third edition. Delhi: Oxford University Press.
- Montaut, Annie (2004) *A Grammar of Hindi*. Muenchen: LINCOM EUROPA.
- 大堀壽夫 (2004) 「文法化の広がりと問題点」『言語』 33(4): 26-33.
- Platts, John T. (1878) [1990] *A Grammar of the Hindustani or Urdu Language*, Second edition. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Sharma, Devyani (2003) Discourse Clitics and Constructive Morphology in Hindi. In: Butt, Miriam and Tracy Holloway King (eds.) *Nominals: Inside and Out*, 59-84. Stanford, California: CSLI Publications.
- Shukla, Shaligram (2001) *Hindi Morphology*. Muenchen: LINCOM EUROPA.
- Snell, Rupert and Simon Weightman (2003) *Teach Yourself Hindi*. Sevenoaks: Hodder & Stoughton.
- 土田龍太郎 (1985) 「ヒンディー語行為者名詞 -vālā の迂説未来的用法」平川彰博士古稀記念会 (編) 『仏教思想の諸問題: 平川彰博士古稀記念論集』 611-626. 東京: 春秋社.
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作 (編) 『日本語文法の諸問題: 高橋太郎先生古希記念論文集』 139-161. 東京: ひつじ書房.
- 角田太作 (2011) 「人魚構文: 日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』 1: 53-75.